
ファンタシースターポータブル2 / アンリミテッド

衛宮スキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2/アンリミテッド

【Nコード】

N8957Z

【作者名】

衛宮スキー

【あらすじ】

衛宮士郎は遠い平行世界に飛ばされる。そこは異世界といってもいい遠い世界。そこで彼はかつての夢である正義の味方とを目指すとともに、新たな目標を立てる……………

プロローグ（前書き）

Fateとファンタシースターポータブル2とのクロスです。
読み専門な私でしたがこの2つのクロスがどうしても見たくなりし
かし見つからなかったため自分で書くことにしました。

無いのならば書けばいい。難しい筈はない。もとよりこの身は、た
だそれだけに特化した思考（妄想）回路

！

といたしました。作者は学校のテストで一番国語が悪いという理数
系です。

また執筆初心者なため至らないことが多くあります。
なにとぞご容赦ください。

この作品は衛宮×エミリアつまりエミエミを推しています。
それを受け付けなかった人は読まないことをお勧めします。

拾い上げてそれを見ると……

(これは……、遠坂が書いたものか！)

遠坂からの手紙には次のようなことが書かれていた。

- ・自分が駆けつけたとき重体の土郎を見つけたため治療を施したこと。
- ・意識を失った土郎を抱えて逃げることは無理だと判断し、土郎がかつて投影した宝石剣で土郎を平行世界に飛ばしたこと。
- ・自分のことはいいから向こうで幸せになれとのこと。

遠坂には本当に感謝してもきれない、もう会えないのは悲しいけど、彼女は最後まで俺を助けてくれた。あの聖杯戦争ときからずっと……

(幸せになる……か。どうすればいいか分からないけど遠坂の最後の頼みだ。正義の味方を目指しつつ俺自身の幸せも探してみよう)

こうして、俺のグラール太陽系での人助け兼幸せ探しの旅が始まった。

プロローグ（後書き）

どうしても土郎の異世界転移ものは最初がテンプレがちになってしましますね。

これからどうやって土郎とエミリアを絡ませようその思想と妄想が進みます。

更新が早くできるようにがんばります。

1 - 1 (前書き)

遅くなってすいませんでしたm(_____)m
もっと早い段階でできてたんですが、あまりにも会話内容が原作の
まんまだったので、土郎らしいところなんかをいれてると予定より
遅くなってしまいました。

俺がこのグラール太陽系に飛ばされてから早半年が過ぎた。

ここでの生活を始めるうえで最も驚いたのが、この世界がもといた世界と惑星創造の段階から分岐した世界であるということである。それにより世界のシステムは大きく変わり、俺が使うような魔法はこの世界には無く、そのかわりフォトンというエネルギーを利用した科学技術が発達しており、道具を使うことで簡単なものなら誰もがその技術を利用できる。それにより、この世界の科学技術は前の世界をはるかに凌ぎ、太陽系にある3つの惑星間を船を利用することで、だれもが宇宙を渡り、惑星間を行き来することができる。

しかし、魔法が使えないということはないらしい。魔力とフォトンは同じ生命力から生み出されたものらしく、グラールでも魔法を行使することができた。根源という概念もこの世界にあるようだ。

また、この世界の霊長に4つの種族が共存しており、「ヒューマン」「ニューマン」「キャスト」「ビースト」といった種族がこのグラールで生活している（俺たち地球の人類は「ヒューマン」と大差ないらしい）。

ここまでくるともはや平行世界ではなく、異世界と言っているな

……

本来、宝石剣ゼルレッチは隣り合う世界の壁に穴を開けることしかできないはずなのだが、そこは遠坂のうっかりがなせる技、こんな遠くまで飛ばされてしまった。

遠坂…………… ナイスウツカリ

うつか凜（誤字にあらず）のおかげで執行者に追われることは無くなったが、俺は今この世界では身元不明ということになる。身元が不明のため、正規の仕事に就くことができない俺は、グラールに

ある三つの惑星の一つ、ニューデイズでフリーの傭兵としてお金を稼ぎつつ、人助けをすることから始めた。

嬉しいことに、ここグラールでは四つの種族が混在しているにもかかわらず、三年前のSEED事変をきっかけに四つの種族は互いに協力し合い、良好な関係を築いている。故にこの世界では人間同士での戦争は無く、俺が人助けとしてできることは、人を襲うモンスターの討伐や小さな行き違いから起こる小競り合いを治める程度である。

もちろんそれだけではあまりお金が貯まらないため、危険でリスクの多いミッションをこなしていき、わずか半年で船を買うことができた。もちろん正規の手段で手に入れたわけではない。

そして今、俺は高額報酬がもらえると聞いて海底レリクスの調査へ向かっている。

そこで俺は、翼を抱く少女と出会うことになる。

(ここが海底レリクスか……………)

俺自身レリクスの中に入るのは初めてだ。内部は薄暗く、所々にクリスタルが生えており、洞窟を思わせるところだが、人の手が加えられた箇所が多く見受けられ、神殿のようにも見られる。

今この場所は多くの人が集まっている。俺と同じように調査をしに来た人たちのようだ。

「……これだけ多くの人数が集まってるってことは大手のスポンサーがついてるようだな。久々にもうけられそうだな。」

そういつて声をかけてきたのは、全身を黒のパーツで覆ったキャストの男性だった。

「そうだな。今回の調査がうまくいけば当分金に困ることはなくなるな。」

そしたら少し休みをいれてグラールを見て回るのも悪くない。

「ほう、どうやらお前も傭兵のようだな。」

「ああ、一人で気ままにやってるよ。」

「所属なしってことは、フリーか？そりゃ大したもんだ。」

ま、場所が場所ってこともあって腕利きを集めているのかもな」「ここって、そんなに危険な場所なのか？」

「この海底レリクスはつい最近発見されたものだ。調査はまだ、ほとんどされていない。このあたりはまだ安全なようだが……奥は、まさに【未開の地】ってわけよ。」

「帰ろ、帰ろうって!」

この場所にそぐわない、まだ幼い声が聞こえてきて、声のする方向に顔を向けると、そこには声の主である金髪の可憐な少女と、顔に多く生えた髭が印象的な、背の高い男性がいた。

「……なんだあの子供は？腕利きの傭兵にはとても見えないが……」

「ここ、レリクスでしょ。本気でやばいんだって!」

や

だ、帰りたいよ!」

「ったく、少しは働きやがれ。

ここは安全だから、今

からおめえ用の仕事を貰ってきてやる。ウロウロしたりするなよ。いいか、ここにいろ!」

「う……」

そう言い残し、男性は少女から離れていった。

「やっぱり、やだ……。」「……やだよ……」

俺は、少女のほうに足を向ける。

「おい、どこへいく。」

「あの子をここから連れ出す。」

「……正気か?」

「あの子、本気で嫌がつてるじゃないか。

それに、ここは

危険なところなんだろ。だったら尚更だ。」

そうして、俺が少女に声をかけようとする

「う……」

少女は苦しそうな顔で、頭を手で押さえると、膝を折ってしゃがみこんだ。

「おい、君!大丈夫か!?」

声をかけて様態を確認しようとするも、こちらに気づく様子はない。

すると、突然。

ドゴンッ！！！

大きな音とともに地面が揺れた。

「おい、なにかマズイぞ。」

「逃げろ！閉じ込められる！」

突然の事態に、周りの人たちは慌てながらも、閉じゆく出口に向かって走り出す。

俺も彼女をつれて、早くここからでないと。

そう思い、少女のところに向かおうとすると……

「なっ！！」

いまだにしゃがみ込む少女の上に、地震によって崩れた岩が落ちてきている。

トレースオン
同調、開始

肉体を咄嗟に強化し、少女のそばまで走り寄ると、双剣を即座に展開し岩を打ち砕いた。

「無事かつ！　　っていない？」

「待って、待ってよ！」

まわりの様子に気が付いた少女は出口に向かって走り出していた。しかし、扉は無情にも閉じられ、俺と少女はレリクス内部に閉じ込められた。

少女は扉の前まで走ると、扉を必死に叩き声を上げる。

この世界にとって、未知の技術である投影を無闇に使うべきではないし、威力や強度は劣るが、こちらの技術はなんの負担もなく武器を取り出せるため、投影を使用する必要がなかったのである。

だが、今こそ使うべき状況ではないだろうか。

そう悩んでいると、扉の反対方向から風が吹いてくるのを感じた。

外に繋がってるのだろうか……よし

「……てっ、まさか奥に進む気？」

「そのまさかだけど……」

「無理無理！やだやだ！危ないって！ここ、未開のレリクスなんだよ？すっごいあぶないんだよ？」

「大丈夫、俺が君を守るから。」

「なあっ！？……あ……うう。」

「どうしたんだ？顔が赤いぞ？」

「な、なんでもないっ！ さっさと行くよっ！」

「……っと、その前に一つ、やる必要がある。」

「なにを？」

「名前。まだお互いの名前を知らないだろ？」

「そ、そういえばそうね……」

「俺の名前はシロウ、シロウ 士郎・エイマヤ 衛宮だ。」

「……ふ、ふーん。あんた、そういう名前なんだ。 あ、

あたしはエミリア。エミリア・パーシバル。」

「エミリアか……いい名前だな。 また顔が赤いぞ？……

やっぱり熱があるんじ」だからなんでもないって！（この朴念仁）

~~~~~！」「……そうか。」

「とにかくっ！……これからしばらく一緒だから……よ、よろしくね。シロウ」

「ああ、よろしく。エミリア。」

レリクスの奥に進むと、そこには原生物がわんさかいた。

「見逃してはくれないよな。」

「シロウ……本当に、大丈夫？　あたし、武器は持つてる

けど、戦闘経験なんてほとんど無いの。」

「ああ。この程度なら問題ない。　それよりエミリアは下

がつていてくれ。」

「……あたしも一緒に戦う。いいでしょ？」

「……分かった。それなら後方支援を頼む。」

「任せて！」

とはいえ、エミリアを守ると言った以上、彼女に負担を掛けるわけにはいかない。

俺たちの前にいるモンスターの数は六体。中型モンスターが二体と、残りは小型だ。

俺は双剣を展開すると、一息でモンスターとの距離をつめて懐に入り込むと、左手に持つ剣で中型モンスターを一体切り払う。続けて右手に持つ剣をもってもう一体を切り捨てる。これで残りは小型が四体、周囲を取り囲むように立っている。

俺は双剣をトランサーに戻すと、新たに長剣を取り出す。そして

「はああっ！」

剣を水平方向に大きく薙ぎ払い、回転切りの要領で周囲のモンスターを一掃する。

シロウが行動を起こしてから、わずか二秒で全てのモン

スターは活動を停止した

「……すごい。もう全部倒しちゃったの？」

「ああ、大丈夫って言っただろう？」

「……なんか、ちょっとホツとしたよ。シロウがいれば、安全っぽいしさ。」

「エミリアを守ると言ったからな。」

「……あ、ありがとう。シロウは優しいよね。初めて会って間もないあたしを守ってくれて。」

「俺がやりたくてやってるんだ。お礼を言われる程のことじゃないぞ。」

「それでも、私は感謝してるの。素直に受け取りなさい！」

「わ、分かった。」

「はああ……それに比べて、おっさんは酷いんだから。」

「レリクスが入り口で、一緒にいた人か？」

「知ってるの？」

「ああ、二人が話しているのを見てたんだ。言い争ってたみたいだけど……」

「うわ……見てたんだ、あれ。みっともないよね。帰りたいって駄々こねて。」

「そんなことはないぞ。たしかに、レリクスの中はとても危険だ。居たくないと思うのも仕方ない。ムリヤリ連れてこられたのか？」

「そう……あたしは軍事会社に登録されてるだけで、戦う気なんてこれっぽっちもなかったのに……だっていうのに、あのおっさん。あたしが働かないからって、ムリヤリ連れ出してこんな危険なレリクスにほっぽって……あー、なんかだんだんハラが立ってきた！こんなかよわい女の子を、一人にするなんてひどいと思わない？」

「たしかに酷いけど……」

「でしょ？やっぱりそうだよね！たしかにあたしも、仕事をえり

好みしてなんにもやってなかったけど……いきなりこれはひどいもんね！」

シロウ、おかわりを

なぜだろう。“なんにもやってない”という言葉を聞いて、セイバーが頭に浮かんできた。彼女は聖杯戦争の間、俺をずっと守ってくれたじゃないか。ニートな腹ペコ王なんて、俺は知らない。

「……ん、どうしたの？そんな微妙そうな顔して？」

「な、なんでもない。」

「とにかく、シロウがいれば無事に帰れるような気もするし、おっさんには後で文句いいまくってやる。」

「ああ、そうするといい」

「SEEDはもう存在しないからレリクスは安全だ、とかいいはって、あたしのいうこと信じてくれないしさ……」

「普通はそう思うんじゃないか？」

「そりゃ、今まで発見されてきたレリクスは、SEED襲来があったときばかりに機能を覚醒させていたよ？でも、全部が全部そうだったかっていうと、そういうわけじゃなかったんだよね。一説によると、SEEDの散布する素粒子に反応して起動しているみたいだけど、同時に磁場の乱れも観測されるから、どうもそれだけじゃないと思うのよね。そもそも、SEEDは三年前に一掃されたはずなのに、こうしてレリクスは起動してるわけでしょ。レリクス自体が何らかのプログラム管理である以上は、トリガーとなるものも、それに準じた……」

「ストップ。すまないが、俺には何を言ってるのかさっぱりだ。」

「……あ。え……ええつとー……」

「詳しいんだな。」

「あ、いや……こ、このくらい常識でしょ？」

「そうなのか？」

「常識！常識だつて！傭兵なら誰だつて、これくらい知つてて当然なの！いい、今の説明は忘れて。どうせあたしが何言つたつて、誰も信じてくれないんだし。」

「いや、信じるよ。」

「え……？信じて……くれるの？」

「俺は傭兵になつたばかりで、そういうことはよく分からないけど、エミリアが嘘をつくような子じゃないのは、今まで話してきてよく分かる。」

「……シロウって、優しいつていうより、お人好しつて感じだね。」

「……そんなことはないと思うぞ……言われたことはあるけど。」

「やっぱり……つていうか、シロウは傭兵になつたばかりなんだ？てつきりベテランかと思つたんだけど。」

「俺は二十歳だぞ。この歳でベテランになつてたまるか。」

「あたしと四つしか変わらないんだ……そのわりには、いい武器もつてるし、すごい強いよね。」

「この武器は、モトウブでクバラ社の技術者を助けたときに、その恩として特注で作つてもらつたんだ。実力に関しては鍛錬のたまものだ。」

武器というのは、先ほどの双剣のことだろう。その見た目は、俺が愛用する宝具【干将・莫耶】に酷似している。

【干将・莫耶】は俺が今まで、長いこと使用してきた剣。使い慣れたものなので、技術者に頼んでこの形にしてもらつたのだ。

まあ、形を似せたものなので、投影したものに比べれば、性能も落ちるし、互いに引き合う性質もない。

「ふーん……守つてもらつた立場としては心強いけど……つて、こんなこと話してる場合じゃない！もう、いいから先に進もう！」

「そうだな。」

そうして俺たちは、レリクスレリクスの奥に進んでいった。

「ずいぶん奥まったところまで来たけど、まだ出口見つからないの?」

「もう外は近いと思うぞ。」

「それならいいんだけど……このまわりに見えるのって、全部大型の自律起動兵器だよ。」

まわりを見渡すと、2mはあろうかという起動兵器、スヴァルティアスヴァルティアが数多く鎮座していた。

本来これは、レリクスレリクスが起動した際に、外敵を排除するために動き出すのだが、今のところその気配はない。しかし

「ただでさえこっち見てて怖いのに、もし動き出したらって考えると……ねえ、早く行こうよ。」

エミリアエミリアのその発言と同時に、そのうちの一台が動き出した。

「

」

スヴァルティアスヴァルティアは声にならない雄叫びをあげる。

「……ちよっ、じよ、冗談でしょ!言ったそばから動き始めないでよ!」

「大丈夫だ。エミリア、下がっててくれ。」

「大丈夫……って、まさかあいつと戦う気?」

「それしかないだろう。」

「……………うー、うううーっ！」

分かったよ、あたしも覚悟決

める！その「大丈夫」って言葉……………信じるからね！！」

「ああ、ならば期待に応えよう。」

俺はエミリアの前に立つ。これならば俺が倒されない限り、エミリアに危害が及ぶことはないだろう。

スヴァルティアは俺に向けて斧剣を振り下ろしてくる。俺はそれを、真っ向から防ぐようなことはせず、剣を打ち合わせた後、力を受け流し、軌道を変え、相手の攻撃を捌く。

斧剣は俺にあたることなく空を切り、相手は大きな隙をさらす。それを狙って、俺は連撃を加え、エミリアはテクニックをぶつける。

それを何度も繰り返し、相手は少しずつ損傷を増やしていく。このままいけば、あと少しで活動を停止するだろう。

そんな矢先

「

！…！」

「……………えっ？きやあ！？」

「エミリアッ！！！」

スヴァルティアは斧剣を地面に突き立てると、上に雷球を発生させ、そこから雷を落としてくる。

俺はエミリアのそばまで駆け寄ると、エミリアを抱え上げ、スヴァルティアから距離をとる。

「怪我はないかエミリア？」

「う、うん。あたしは大丈夫……………」

「そうか、よかった。次で終わらせる。エミリアはここにいてくれ。」

「わ、分かった。」

そう言っつて、俺はエミリアを降ろすと、ナノトランサーから斧を取り出す。

そして、大きく跳躍し、スヴァルティアの真上まで来ると

「であああー!!」

落下とともに、斧を振り下ろす。

スヴァルティアは、斧によって肩から切り裂かれ、ゆっくりと仰向けに倒れた。

「……お、終わったの？」

「ああ、これだけやればもう動かないだろう。」

「すごい、本当にすごい！あんたを信じてよかった！やった、やったあ！」

そう言っつて、走り寄っつてきたエミリアは、俺に抱きついてきた。

っつて、あ、当たってる！む、胸が！！

エミリアも自分が何をしているのかを気づき、俺から咄嗟にはなれる。

「じ、ごめん！嬉しくっつつい……」

「い、いや。誤ることは無い……」

こんなかわいい女の子に抱きつかれて、嬉しくないはずがない。かなりドキドキした……

故に、気づくのが遅れてしまった

「っ……っ……エミリア、危ないっ……」

「えっ？」

完全に活動を停止していなかったスヴァルティアが、エミリアに爪を振り下ろしてきたのだ。

俺はエミリアをかばうため、エミリアのかわりに、その一撃を受ける。

「があっ！！」

「シロウツ！！」

俺は軽々と吹き飛ばされ、壁に激突する。

エミリアは悲鳴を上げ、俺に駆け寄ってくる。

胸からは血が流れ続け、意識も遠のいていく。

でもだめだ。まだスヴァルティアは動いている。このままじゃエミリアが危ない。

トレスオン  
投影、開始

俺は剣を一本投影する。宝具ではないが、それなりの名剣だ。

それを、今こちらに向かって来ているスヴァルティアにむけて飛ばす。

剣はスヴァルティアに刺さるとわずかに相手を後退させる。しかし、これだけでは倒れない。だから

ブローケンフアンタズム  
壊れた幻想

剣のイメージをわざとずらし、内包された魔力による爆発を起こし、スヴァルティアを今度こそ完全に破壊した。

エミリアは後ろで起きた爆発に身を竦ませるも、振り返ることなく、俺のもとまできて、膝をつける。

「やだ、やだよ……！どうしてあたしなんか……かばって……」

「……エミリアを……守るって……言ったからな……」

「だからって！シロウが怪我する必要ないじゃん！」

いよいよもって意識が危つくなってきた。

「起きてよ…起きて…起きてっばー!」

エミリアが泣いている。女の子を泣かしてはいけないって、しいさん切嗣にいわれてるのにな。

ごめん、じいさん。ごめん、エミリア……

そうして俺の意識は途絶えた。

『あなたを……死なせはしません』

side エミリア

シロウは変な奴だった。最初見たときは無愛想な奴だと思った。でも、初めて会ったあたしに“守る”なんて言ってくれて、あたしの言うことも信じてくれて、かなり鈍感だけど、すごい優しい奴だった。

無事外にでたら、できる限りのお礼をしよう。……そう思ったのに……

シロウはあたしをかばって瀕死の重症を負っている。このままでは確実に死んでしまうだろう。

どうして!どうしていつもこうなの!

みんなあたしを置いていっちゃうの!?

あたしを置いていかないでよ！ひとりにしないでよ！  
お願いだから……目を開けてよ……！  
まだなにもお礼できてないんだよ！  
誰か、誰でもいいから……  
助けてよおっ！

ここからあたしの記憶は途切れ、次に目を覚ましたら、リトルウ  
イングの医務室にいた。

1・1(後書き)

戦闘のシーンって難しいですね(^| ^:)

誤字、脱字等があれば知らせていただくと幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8957z/>

---

ファンタシースターポータブル2 / アンリミテッド

2012年1月2日05時45分発行